



私のココロ、  
彼のココロ。



鳴海はるか

私は自分で言うのもなんだけど、今まで結構幸せに生きてきた、と思う。  
そこそこ友達もいるし両親と弟とも仲がいいし、幸せだーって思う。  
ただ、ひとつだけ悩みがあった。

どうしても男の子を好きになる、って言う気持ちが分からない。

別に変な意味じゃなくって、男の子の友達もいる。

要するに、恋愛感情を男の子に抱くってということがわからない。

何度か告白もされたことがある。

自分の知っている子だったり知らない子だったりしたけど、いい加減な感情で付き合うのは悪い気がして全部断った。

友達からは、とりあえず付き合っちゃいなよーって言われるけどそうする気にはなれなかった。

だからといって恋愛に興味がないって言うわけじゃなくって、ドラマなんかで見る恋愛には普通に憧れたりもする。

だから逆にそこが変なんだよ、って友達にはよく突っ込まれたり。

いつか私にも恋愛相手の男の子が現れるのかな・・・。

僕は女の子が苦手だ。

いろいろと些細な理由はあるが、ひとつ決定打がある。

それは見た目が中学時代に女の子っぽいからと、女の子の制服を着せられてみんなの晒し者にされたことがあるからだ。

それに何かあるとすぐに女にはできないから男がやれって言うし、本当に腹が立つ。

本当に女の子の中には悪魔でも住んでいるんじゃないかと思う。

周りの友達なんかは色恋沙汰で騒いでいるけど、僕から言わせてもらえば滑稽以外の何者でもない。

そんなことに時間を費やす暇があったら、勉強をするべきだ。

みんなじきに来る就職のことを考えているのだろうか？

それには学歴がいる。

だから少しでも時間は勉学に費やすべきだ。

恋愛することなんて考えもしないけど、もしするにしても進路が決まってからでも遅くないだろう。

なんでみんなそんなに恋愛ごとで騒ぐのか僕にはまったく分からない。

今日はたまたま寝坊して遅刻してしまった。

寝坊したと入っても10分くらいだし、目覚ましは壊れてたんだからしょうがない、と自分では思ってる。

でも先生にそんな理由は通じなかった。

それでも必死に食い下がっていたら、先生がひとつ交換条件を出してきた。

「そこまで言うなら期間限定で図書委員をやってくれんか？二人いた図書委員がよりによって転校してしまって困ってるんだよ。」

「それって二人分を一人でやれってこと！？ひょっとしてその二人も本当はめっちゃ忙しくて辞めたとか。」

「いや、もう一人は別の先生が探してくれてる。一応アテがあるみたいだな。仕事はそんなに忙しくないと思うぞ？」

「失礼しましたあー。」

結局先生に押し切られてうんと言っちゃった。実は高校に入って二年間、一度も図書館に入ったことすらなかったりする。

いざ図書室に入ると、もう先客がいた。

男子の制服を着てなければ分からないような美少年が椅子に座って本を読んでいた。

先生に頼まれていたプリントを持っていき、帰ろうとすると後ろから引きとめられた。

「ちょっと頼みたいことがあるんだが。」

すごく嫌な予感がする。

「図書委員が足りないから図書委員をやってくれんか。」

「いえ、これから受験戦争にも入っていくわけだしそんな暇はないと思いますが。」

「そういうだろうと思った。しかしな、ここで図書委員を務めれば内申にもこのことが書ける。決して悪くはないと思うんだけどな。」

さすが大人、やることが汚い。そう思いながらも僕はそれを承諾して図書室に向かった。

いざ図書館に入ると誰もいない、他の委員は誰もいないのかな？

仕方ないのでこの間にでも勉強をやっておこうと思った。やり始めてから思ったんだけど、ここは勉強に向いている。なんといっても静かなこと、資料が山のようにあることだ。

「意外とこの仕事は引き受けてよかったのかも。まさに一石二鳥だ。」

そう呟いたところでそれまでの静寂が打ち破られることになった。

女の子が一人、図書館に入ってきたのだ。

「こんにちは。」

私は綺麗な顔の男の子にとりあえず挨拶した。返ってきた言葉は予想していたのとはまったく違う言葉だった。

「見て分かると思うけど、僕は今勉強をしている最中なんだ。用事がないなら出て行ってくれないかな？」

その間まったく私の顔を見ようとしなない。

そこまで言われちゃ私も黙っちゃられない。

「あなたがそんなに陣取ってたら、他に本を借りに来た人に迷惑でしょ。その本貸してあげるから勉強は家ですれば？」

「あのさ。ひとつ聞きたいことがあるんだけど。」

彼が初めて顔をあげてこちらを向いた。

「なによ。文句でも言いたいわけ？」

「君ってひょっとして図書委員？」

「そうだけど何か文句でもあるの？」

「奇遇だね。僕も図書委員なんだ。」

その後しばらく二人の間を当然気まずい雰囲気 flowed . . . .

図書館に入ってくるなり「こんにちは。」とか挨拶してくるなんてなんて低脳な女なんだろう。

普通は図書室には静かに入ってくるものだ。

無視していると、今度はここで勉強すると他の利用者の邪魔になると言ってきた。別に席を占領しているわけじゃないし何を言ってるんだ。

さらにあきれたことに自分は図書委員だと威張った上に、僕に図書委員かと聞いてきた。

まったくそのとおりだよ。

なったばかりだけれどね。

「奇遇だね。僕も図書委員なんだ。」

さすがに馬鹿な女でも状況がつかめたらしい。

彼女が黙ったのを確認して僕はまた勉強を再開した。

気まずい雰囲気のままだったけど、ちょっとこのままじゃ耐えられそうに無い。  
そうだ、図書委員になったんだから図書委員らしいことをしよう！  
思ったのはいいけど一体、図書委員って何をすればいいのかも分からない。  
確か先生に頼まれたときに何か言ってたと思うけど、面倒だから聞き流してたんだよね・・・。  
そういえば全然人こないな・・・あ、これは会話のきっかけに使えるかも？

「全然お客さん来ないねー！」  
彼はもうすでに顔すら上げずに言い放った。  
「お客さんじゃなくて利用者だろ。」  
はい、いいツッコミもらいました！でも会話は終了しました・・・。

心なしか話そうとすればするほど関係が悪化してるように思えるのは・・・気のせい？  
今までこんな感じの子と友達になったことが無い、というかたぶん本能的に避けてたからどうしたらいいのかまるで分からないよ・・・。

順調に勉強を進めていたが、なんだか「うー。」とか「あー。」だとか声がする。  
気になってチラッと見てみると腕を組んで歩き回りながら一人百面相をしていた。  
その姿があまりにもおかしくてちょっとつぼに入りかけた。  
向こうは僕がチラ見しているのには気付いてないみたいだった。  
でも急に歩くのを止めてこっちに向き直ったので慌てて下を向いて勉強している風を装った。

「お客さんこないねー！」

「お客さんじゃなくて利用者だろ。」

この時はかなり危なかった。

さっきのでつぼに入りかけていたときにコントみたいな会話をしてしまったので、もう彼女の顔を見てしゃべることもできなかった。

きっと一所懸命に笑いを堪えていたから耳なんかは真っ赤だっただろう。

ひょっとしたら肩も震えていたかもしれない。

僕は落ち着くためにそっと深呼吸した。

結局その日は図書館の利用者が一人も来ないまま終わった。

あの静寂の中、一人で耐えるのはきつかったよー・・・明日学校に着たら友達に愚痴でもこぼして解消しよう・・・。

彼が施錠し、その鍵を持って職員室へと向かう。

所定の位置に鍵を掛ければ、あとは帰るだけだった。

「あのっ。ひとつ質問いいですか？」

私は緊張しすぎて声を上ずらせて、しかも右手をピンと伸ばして質問してしまった。

めっちゃ恥ずかしい・・・。

彼はちょっとだけ私を見たけど、すぐに向こうを向いてしまった。

「なに？」

よかった。一応反応はしてくれた。

「図書室の鍵持ち帰っちゃダメなの？」

「そんなの常識的にダメだろ。」

ううっ、私は常識も知らない女ですよっ！

途中何度かつぼに入りかけながらも図書室も閉館の時間になった。

これで初の図書委員の仕事も終わりだ。

消灯を確認し僕と彼女は扉の外に出ると、僕は持っていた鍵で施錠した。

あとはこれを職員室まで返しに行けばいい。

所定の場所まで行き鍵を掛けたところで突然彼女が声を掛けてきた。

「あのっ。ひとつ質問いいですか？」

いきなりだったので思わず振り向いたが右手を真上に上げながらプルプルしている彼女を見るとまた笑いがこみ上げてきた。

これはやばい。すぐに向こうを向いて答えた。

「なに？」

もちろんこの間に僕は噴出しそうなのを必死で堪えていた。

「図書室の鍵持ち帰っちゃダメなの？」

「そんなの常識的にダメだろ。」

ダメだ、本当に一度つぼに入ると抜け出せなくなって困る・・・。

私は彼と一緒に職員室をでて下駄箱へ向かった。

下駄箱は離れていたもので別々だったけど、靴を履き替え終わるとまた彼と合流することになった。

ヘンに彼から離れるのも不自然だし、並んで校門の方へ向かう。

「それじゃあまた明日。」

「うん、また明日。」

校門を出て自宅へと向かう。・・・んだけど、彼もずっと付いてくる。

な、なに！？実はストーカー？変質者！？

慌てた私は彼からダッシュで前へ走ったり逆に走ってみたりしたけど、相変わらずだった。

仕方なくまた彼の横に並ぶと、私は意を決して聞いてみた。

「ひょっとして家こっちの方なの？」

「もちろんそうだけど、君はどう考えていたわけ？」

「あの、ひょっとしてストーカーとか変質者なんじゃないかと・・・。」

「ストーカーとか変質者？」

うわ、これはぜったい怒っている顔ですよ！またやっちゃったよ、私。

結局彼の家は私の家から数件先の家だった・・・。

僕たちは下駄箱へ行くと別々に靴を履き替えたが、計ったかのように同じタイミングで履き終えてしまった。

その状況でわざと距離をとって歩くのも不自然だと思ったので校門までは一緒に行こうと決めた。

じきに校門に着き、

「じゃあ、また明日。」

「うん、また明日」

といって別れようとしたが彼女の足も同じ方向に向いた。

そうか家は同じ方向なんだな、とっていると急に彼女が前に後ろに走り出した。

何なんだ一体……。しばらくすると彼女が戻ってきて言った。

「ひょっとして家こっちの方なの？」

「もちろんそうだけど、君はどう考えていたわけ？」

「あの、ひょっとしてストーカーとか変質者なんじゃないかと……。」

ストーカーとか変質者なら図書館に二人きりの時点ですでに事件になってるよ！しかもさっきの彼女の挙動の方がよっぽどおかしいし！

僕は笑いをかみ殺しながら言った。

「ストーカーとか変質者？」

どんな顔をしていたのか自分で分からない。ただ、変な顔していなければいいけど……。

そして結局、彼女の家は僕の家より数件前の家だった。

図書委員になってから何日かたった。

最初はまったく分からなかった仕事だったけど、先生と、あとは意外にも彼のおかげで何とかうまくやれている。

彼は基本的には最初に会ったときのようにずっと勉強をしているけど、私がわからなかったりできなくて困っているときにはさりげなく助けてくれる。

そういえば、彼が一番変わったのはたまに笑うようになったことだ。

大体笑うタイミングが私が何かやらかしたときが多いのが引かかるけど、やっぱり誰でも笑っているのが一番いいに決まってる。

だから私の失敗も決して無駄じゃないんだよ。

うんうん、そうだそうだ！

なんて腰に手を当てて大きく首を振ってたらまた笑われちゃってるよ……。

何でこういうタイミングでこっちを見てるかな。

「もう、こっち見ない！笑うの禁止！」

「いや、そんなことしてたら誰でも気になって見るから。笑うのも当然だし。」

ううう、いつか彼に勝てる日は来るのかな……？

図書委員になってから数日過ぎた。

彼女は相変わらずヘンなことをしながらも何とか仕事をこなしている。

僕は相変わらず基本的には勉強をしている。・・・振りはしているが、実際には彼女が次に何をやらかすのか気になってしまってあまり進んでいない。

最初は彼女がへんなことをするたびに笑いそうになるのをずっと我慢してきたが、最近はまだあきらめておかしい時は笑うことにした。

そんな時大体彼女の方は微妙な表情をしていることが多いけれど。

こんな感じでやっているせいか最近学校にいる間は勉強が進まないことが多いけれど、家では逆に集中できて勉強がはかどることが多い。

やっぱり時には息抜きが必要、というのは本当なのかもしれない。

そしてこんなことを考えている間にも彼女の方を見たら腰に手を当ててなにやら満足そうにうんうんといった感じでうなずいている。

首振り人形か？とか考えたらまた笑いがこみ上げてきた。

「もう、こっち見ない！笑うの禁止！」

彼女は真っ赤な顔をして言ってくるが仕方がない。

「いや、そんなことしてたら誰でも気になって見るから。笑うのも当然だし。」

これで今日も家に帰ってから勉強がはかどりそうだ。

「あれ、今日はなんだかふらふらする。」

熱を測ったら38℃。この熱じゃ学校は休んだ方が無難そうだ。

お母さんに学校へ休みの電話を掛けてもらって、市販の薬を飲んで休むことにする。

昼間は誰もいないから薬を飲んでゆっくりできるし、明日にはたぶん熱も下がってるはず。

目を覚ますともうすでに夕方だった。

枕元に置いてある体温計で熱を測ってみる。

37℃。

うん、これなら明日の学校は大丈夫だ。

するとちょうどお母さんが部屋に入ってきた。

「大丈夫？熱はどう？」

「大丈夫。熱ももうほとんど平熱だから明日の朝には治ってると思うよ。」

「じゃあ安心してよさそうね。今お友達が来てるから部屋に通してもいい？」

「うん。」

てっきりクラスの友達だと思ってたら来たのはなんと彼だった。

パジャマも少し着崩れた状態だったから、恥ずかしくなって布団を顔が半分隠れちゃうくらいに引っ張ってごまかした。

「ごめん。邪魔だったかな？一応気になったからお見舞いに来ただけど・・・。」

「ありがと。もう大丈夫そうだから明日は学校行けると思・・・くちっ！」

・・・なんて空気の読めなくしゃみ。これじゃ大丈夫じゃないみたいじゃない。

ふっと自分の視界が一瞬暗くなったと思ったら、彼が私の額に手を当てていた。

えっなに！？なんでこんなことになってるの？

「・・・まだちょっと熱っぽいね。無理させて熱が上がると悪いから僕は帰るよ。」

彼はすごく自然に帰っていったけど、私は相変わらず動転したままだった。

・・・なんだかさっきより熱っぽいみたいだから、早く寝ちゃおう。

今日はどうやら彼女は学校を休んだみたいだった。

委員の担当の先生にも確認を取ってみたが、風邪で休みだと聞かされた。

何とかは風邪を引かない、というけどそういうわけじゃないらしい。

放課後にいつものように勉強をしながら時折来る利用者の応対をしていたけど、彼女がいなくて勉強するには絶好の機会だったのにもかかわらず勉強ははかどらなかった。

今日は早めに仕事を切り上げて様子でも見に行ってくるか。

帰り道にある洋菓子店でお見舞いのケーキを買って家へ向かう。

家の前まで来てインターフォンのボタンを押そうとしたところで後ろから声を掛けられた。

「あら、ひょっとしてお見舞いにきてくれたの？」

「はい。」

彼女の母親だろう。鍵を開けて中へ招き入れてくれた。

僕はお見舞いの品を渡す。

「ちょっと様子を見てくるから待っててね。」

僕はお見舞いの品だけ渡すつもりだったんだけど・・・。

しばらくすると、

「調子が良くなってきてるみたいだし顔を見せてあげて。」

といわれた。こう言われてしまっては行かざるを得ない。彼女の部屋の位置だけ聞いてから向かう。

部屋へ入っていくと彼女はとても慌てた様子で布団をかぶって目だけ出したような状態になってしまった。

「ごめん。邪魔だったかな？一応気になったからお見舞いに来ただけど・・・。」

「ありがと。もう大丈夫そうだから明日は学校行けると思・・・くちっ！」

大丈夫だって言いながらくしゃみしてるじゃないか。顔も赤いし。

僕は自分でも無意識に彼女の額に手のひらを当てていた。

すぐに自分は何やってるんだ？と思ったら急に恥ずかしくなってきた。

「・・・まだちょっと熱っぽいね。無理させて熱が上がると悪いから僕は帰るよ。」

正直僕自身恥ずかしくて熱があるかどうかまったく分からなかったんだけど、彼女に知られるのも恥ずかしくて適当に言った。

家に帰り際に僕は考えていた。

なんであんなことしちゃったんだろう？

翌朝目が覚めると、昨日とは違っていつもの感じだった。

念のために体温も測ってみたけど平熱。

昨日彼がお見舞いで持ってきてくれたケーキを朝から食べて家を出ようとした。すると彼が門のところにいる！

「お、おひゃよう！」

思わずかんじゃったよ……。

そんな私に彼はあきれたような顔で言う。

「まだ風邪が治ってないんじゃないか？」

「そんなことない！元気元気ー！」

がつんっ！

「◎★！△＃\$！？」

思いつ切り門の縁に手をぶつけた私は声にならない悲鳴を発したけど、彼は怪我はしていないと見て分かったみたいでぶつけていないほうの手を引いて歩き出した。

「ほら、早くしないと遅刻するぞ。」

ぶつけた手はジンジンして熱をもっていたけど、それより握られた彼の手は温かった。

翌朝、目が覚めて登校する支度をしている間中、僕は彼女のことを心配だった。  
昨日は大丈夫なんて言っていたけど夜の中にまた熱を出しているかもしれない。家を出て彼女の家の門の前まで着た僕は無意識にそこで立ち止まっていた。  
そこへちょうど彼女が出てきた。よかった。どうやら風邪は治ったみたいだ。

「お、おひゃよう！」

・・・やっぱり治っていないんじゃないか？

そう思ってよく見ると、多少顔が赤い気がする。

「まだ風邪が治ってないんじゃないか？」

「そんなことない！元気元気ー！」

がつんっ！

「◎★！△＃\$！？」

思いっ切り門の縁に手をぶつける彼女。なんとも形容しがたいうめき声を発していたけど、いつもの彼女だ。

怪我はしてなさそうだし大丈夫だな。

そこでふと時計を見ると結構時間が経っていた。彼女のぶつけていないほうの手を引いて歩き出した。

一瞬はっと我に返って手を離そうとした。けど、結局手を離すことはしなかった。

「ほら、早くしないと遅刻するぞ。」

つないだ手はとても温かかった。

放課後はいつもどおりに図書委員の仕事。

今日はいつもの仕事だけじゃなくて、蔵書の整理と新しく入ってきた本の整理をしないといけなかった。

古かったり利用者のほとんど無いような本を抜いて新しい本を入れていく。

彼はもうすでに来ていて仕事を始めていた。

「僕が古い本を抜く作業をするから、君は新しい本を入れていってくれる？」

「了解一。」

私たちは黙々と本を出し入れしていく。

正直思ったより地味な上にしんどい作業だった。

私は彼に何か話しかけようかと思ったけど、昨日と今日の朝のことを思い出したらなんか恥ずかしくなって切り出せなかった。

彼も私に話しかけてきてくれない。

退屈だなあーっと伸びをしようとしたときに、目の前の本が入ったダンボールに手が当たってしまった。

あと思ったときにはその目線くらいまで積み上げてあったダンボールが私のほうへ倒れてきた。

「危ないっ！」

次の瞬間には私はそのまま後ろに倒れていた。

そして・・・目の前ギリギリに彼の顔があった。

一瞬あまりの至近距離に彼の顔があることに慌てたけど、彼の表情を見てそれどころじゃない事が分かった。

倒れてきたダンボールが彼の上に載ったままになってる。本が入ってかなり重かったからつらいはずだ。

声を掛けようとしたところで私ははっとした。頭から血が出てきて垂れている。

でもこの状況じゃどうにもならない。どうすれば！？

と思ったところで運よく人がきた！

「すみません、彼が大変なんです！この上のダンボールをどけて、あと保健室にも連絡してください！」

放課後はいつもの図書委員の仕事に加えて、蔵書の整理と新しく入ってきた本の整理をしないと  
いけなかった。

古かったり利用者のほとんど無いような本を抜いて、新しい本を入れていく。

僕が作業を始めるとほどなくして彼女もやってきた。

「僕が古い本を抜く作業をするから、君は新しい本を入れていってくれる？」

「了解ー。」

僕たちは黙々と本を出し入れしていく。

ただただ地味な作業だった。その上いっぱいになったダンボールはすごく重たい。

気を紛らわせるのに僕は彼女に何か話しかけようかと思ったけど、昨日と今日の朝のことを思い  
出したらなんか照れくさくなって切り出せなかった。

彼女も同じなのか、話しかけてきてくれない。

チラッと彼女を見てみると、伸びをしようとしていた。

こんな作業じゃ伸びもしたくなるよな、と思って自分も伸びをしようかと立ち上がったときに、  
彼女の手が目の前の本が入ったダンボールに当たった。

そのダンボールはバランスを崩して彼女の方へと倒れていこうとした。

「危ないっ！」

無我夢中だった。

何とか彼女とダンボールの間に入り込めたがダンボールの重さには耐えられるわけも無く床へと  
倒れこむ。

心配そうに自分を見る彼女を見て僕は安心すると、次第に視界が暗くなってきた。

私は制止の声を振り切って保健の先生と一緒に救急車に乗り込んだ。

私を庇って怪我をした彼のことを放って自分だけかえるだとか、そんなことは有り得ないことだった。

救急車は緊急外来に着いて、そこから彼は手術室へとそのまま運ばれていった。

保健の先生と二人で待っている間に彼のご両親も見えた。

私は彼のご両親の前へ行き、頭を下げた。

「すみません！私のせいで彼が怪我をしてしまったんです！私のせいなんです！」

「詳細は先生から聞いているけど、絶対に君のせいではないから気にしないで。それよりも君がそんなに息子のことを心配してくれていることのほうが嬉しいよ。」

そうやってハンカチを私のほうへ差し出してくれた。そういえば私、ずっと泣いていたから顔がぐちゃぐちゃかも、とそのときはじめて気付いた。

「私ティッシュ持ってるのでそれで拭きます。」

涙を拭いたり鼻をかんだりしていると、手術室からお医者さんが出てきた。

「手術は無事に終わりました。手術と入っても頭を数針縫っただけですけどね。後は脳震盪と軽い打撲をしていたので全身のスキャンを行っていますが問題ありませんでした。安心してもらっていいですよ。」

あ、やばい、安心したらまた涙が出てきた・・・。

あと医者の方が言うには麻酔を打っているのだから起きないということと、念のため今晩は入院ということだった。

そこで本当は付き添いは親族だけのところをご両親に頼み込んで自分が付き添うことにしてもらった。

病室に移された彼の隣りに、いすを持ってきて座った。

よく考えたら、こんなにまじまじと彼の顔を見るのは初めてだった。

手を握ってみた。当然だけど温かくて安心した。

今までは気付かなかったけど、手が私より全然大きくてやっぱり男の子なんだなあー、って思った。

あらためて思い出すと今日だけじゃなくて、いつも彼は私のことを助けてくれた。

最初はどうしようかと思ったけど、今は彼のいない生活は考えられなかった。

あーあ、いつの間に私の中を彼がこんなに埋め尽くしていったんだろ。

彼の手を握ったままベッドに頭をポスッと乗せるととっても気持ちよくなってきた・・・。

はっと目を開ける。

彼女は怎么样了？ここは？

ベッドから起き上がろうとしたら頭と背中が痛い。

頭には包帯も巻いてあった。

それに右手もなんだか重くて動かない。

そちらへ首を曲げ見てみると、彼女が僕の手を握り締めて寝ていた。

「付き添ってくれたのかな。」

僕は彼女が握っている手を解こうかと思ったけど、思い直して逆に握り返してみた。

温かい。それにこんな小さな手だったんだな。

それにこんなにずっと顔を見たのも初めてだ。

・・・この笑顔にいつも僕は癒されていたんだな。本当に彼女のことを助けられてよかった・・・。

彼がそっと彼女のことを見ているとふいに彼女が

「ケーキがあー、食べたいんだよおー。」

と結構はっきりとした寝言を言った。

彼は思わず、ぶっ！と嘔き出した。

そこで彼女は目を覚ました。とはいってもかなり寝ぼけた感じだ。

「ふにゃ？」とか言いつつ目をこすろうとして、そこで手が上がらないことに気づいた。

彼女の顔が見る見る真っ赤になっていく。

彼女が恐る恐る彼を見ると、彼は笑いを堪えている感じで言った。

「そんなにケーキ食べたいんだったら、今度連れて行ってやるよ。」

「・・・ひょっとしなくても私寝言を言ったんだね・・・。恥ずかしくてもう顔も見れないよ・・・。」

そう言ってまたベッドに突っ伏してしまう。

だがよく見ると彼女の肩は小刻みに震えていた。

「よかった。またしゃべれてよかった。顔を見れてよかった。」

「僕もそう思ってる。また君としゃべることができたし、顔も見れた。あのさ。君に伝えたいことがあるんだ。」

「ちょっと待って。私も伝えたいことがあるから。」

「じゃあ、同時に言おうよ。3、2、1。」

『君のことが好き。』

私のココロ、彼のココロ。

<http://p.booklog.jp/book/65581>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65581>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65581>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ